

壬午年旦

仙府獅子門
是非菴連中

特別
A5
6673
27
早稲田大学図書印

美と



松崎のお明

玉乃かきり

尾

道つと^二佛^一の神

ね収

是非

芳角

宝曆十三年

雪のまの首

田の畑

何の玉を

壺中亭

湘そのや雪尔磨ぬく淋乃積 芳泉

えのや牛此新乃隣まゝ 李角

ぬひよや魚物よるもの 板角

え日や幸貢海一々 板角

おららよ並乃ん神の福骨 仙角

夏遊して草外もか一年の如く一洞
流瀬も皆とてくさ池の初日は 麦里
そいつれ雨子の柳乃 蒸くう中 花秋
一かたりはは 晴りう 初よみ 又庸
雪や 藪うり 是乃 不ぬ 云葉 云湖
日の新と 整よ 伸よ 中か かり 湖光 掉寄
一方星のよよ あり 水 存乃 級 文 記
え 初 や か さ ぎ ぎ 一 氏 の 竈 ぐ ぐ 雲 素

半そめ 此 室よよ と 出と 柳う ね 長 江
存よ 原と 喰ん 大よ の 雲 作 葉 山
句 接し 居る 枝や 春と して 笑ひ 初 編 英
上下 や すし 角 髪乃 とし 男 泉 志
末 度く 是は 晴り 葉 石 芦 水
え 初 や 了 士も 原と 首 小 袖 又 水
車 井の 外よ 言が 一 四よ の 是 洞 水
さう 山に 激く 新 あり かせり 海を 西 江

く川をたどりて海へ一田子の浦 崩来

芳白舎

山王

山王の御下りや山かゝり 角序

柴箇亭

尺八の京籠る友やと 悪む秋

世の世の凡水ととも 散るる 世に

松平の縁組候して 幸甚るぬ 泉志

後市や 深き堂ふて 人なり 一洞

山王の御下り 山王の御下り

候つとも 又御ぬ人とも 所 仙角

牛ひまの 与作も 与作も 与作も

人なりとも 時をて 坊やと 市 茶山

傾城の 素良を 見たり 猿松ひ とる

就一に 与作の あり 落乃 齋 具 齋

是れ 戸も ひも 多くと 梅の 花 安五

と 信じて 与作の あり 齋 舟 律 齋

隣への出入もまじに味をくかき

藤面よまき点いあ〜大みりゃ 又庸

白りよれまのほろやあ〜も 梅莫

候をや屏凡の山乃ふ笑よれ 文起

さよとん後の八人遊ま〜し〜 坂下

さか娘をいおやたる 遠まま まま

人並小神も扱くや〜さぬ 蔵ま

さゆ扇よも氷の音やまの市 芳泉

さ〜掃や扇の音も〜 伏掛ひ 百勝舎 孝角

人日

孝角

新中よ小松のそめぬがさか

身よさる葉乃は〜と〜

雪のい〜と〜をゆ〜れ〜山〜

人皆と〜や人のほ〜と

